シリーズ・Series
地域の環境保全

魚類学雑誌 72(1):93–98
2025 年 4 月 25 日発行

八の字堰の復元は球磨川のカジカ回遊型を復活させた？

Has the rebuilding historical river structure revived the habitat of amphidromous sculpin in the Kuma River, Kumamoto Prefecture, Japan?

九州に生息する淡水カジカ科魚類

九州に生息する淡水カジカ科魚類は，降河回遊型のヤマノカミ *Trachidermus fasciatus* とカマキリ *Cottus kazika*，陸封型および両側回遊型のカジカ *Cottus pollux* が挙げられる．ただし，カジカについては九州各県のレッドデータブックやレッドリストでの種名や学名の取り扱いが様々であり，陸封型はカジカの大卵型か中卵型，両側回遊型はカジカ中卵型かウツセミカジカ *Cottus reinii*（カジカ小卵型）として記述されている（福岡県，2014；鹿児島県，2015；熊本県，2019；長崎県，2022；大分県，2022；佐賀県，2016）．

日本産魚類検索第三版（中坊・甲斐，2013）に基づくと，胸鰭条数の違いからカジカとウツセミカジカに区別できるが，分類学的付記においてカジカ大卵型，中卵型，小卵型およびウツセミカジカの学術的な妥当性について解説するとともに，“できるだけ早く「カジカ問題」が解決されることを願いたい”と記述されている．九州内のカジカについて広域的な分布調査に加えて，外部形態，遺伝的特徴を整理した Kanno et al.（2018）は，胸鰭条数と生息場・流程分布の特徴から，九州のカジカを 2 集団（陸封型：胸鰭条数 13 で主に大水系の河川上中流に生息；両側回遊型：条数 15 で主に小水系の河川下流に生息）に区分できるとした一方，ミトコンドリア DNA 分析結果においてそれらが既知のカジカ中卵型とともに単系統を示すことを報告している．ただし，遺伝子浸透の可能性を否定できないため，複数の核遺伝子座の解析が必要であるとも考察している．このように，九州のカジカについては更なる学術的検討の必要性があり，筆頭著者もできるだけ早くこの問題が解決されることを願いながら，ここでは両側回遊型のカジカ（図 1a；以後，カジカ回遊型と称す）を取り扱う．

九州のカジカ回遊型の分布の現状

筆者ら（鬼倉・中島）は 2005 年にカジカ回遊型を対象とした分布調査を実施した．当時，熊本県の氷川に本種が生息することは知られていたものの，1960 年代に生息の記録がある大分県大野川，福岡県室見川，鹿児島県米ノ津川など（倉若，1985）からの 2000 年代の記録がなく（図 2），その他の河川ついては生息情報が乏しかったためである．本種が姿を消す最大の要因は，横断構造物による遡上阻害と考えられたため，主な調査対象河川を，平野が小さい，あるいは平野がほとんど発達していない急勾配の川とした．これらの河川では，海域からカジカ回遊型の生息場である河川の礫床区間までの距離が短く，その間に横断構造物がない可能性があったためである．最初に狙った地域は佐賀・長崎県境の多良岳・国見岳から注ぐ河川で，シュノーケリング下で目視確認を行った．濁度が高い一部の河川ではたも網による採集を補足的に行った．

調査の初日（2005 年 2 月 11 日）の糸岐川で本種を発見できたため，大きな期待感を持ちながら調査を継続したが，結局，約 30 河川中 4 河川でしか確認されなかった（図 2）．これらの調査河川には，倉若（1985）で記

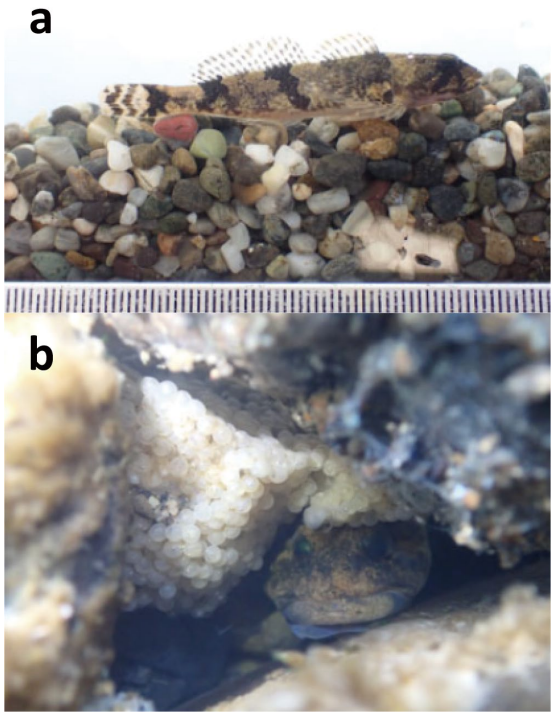

図 1. 球磨川産カジカ回遊型の当歳魚（a：2021 年 9 月撮影）および卵塊と保護雄（b：2022 年 1 月撮影）

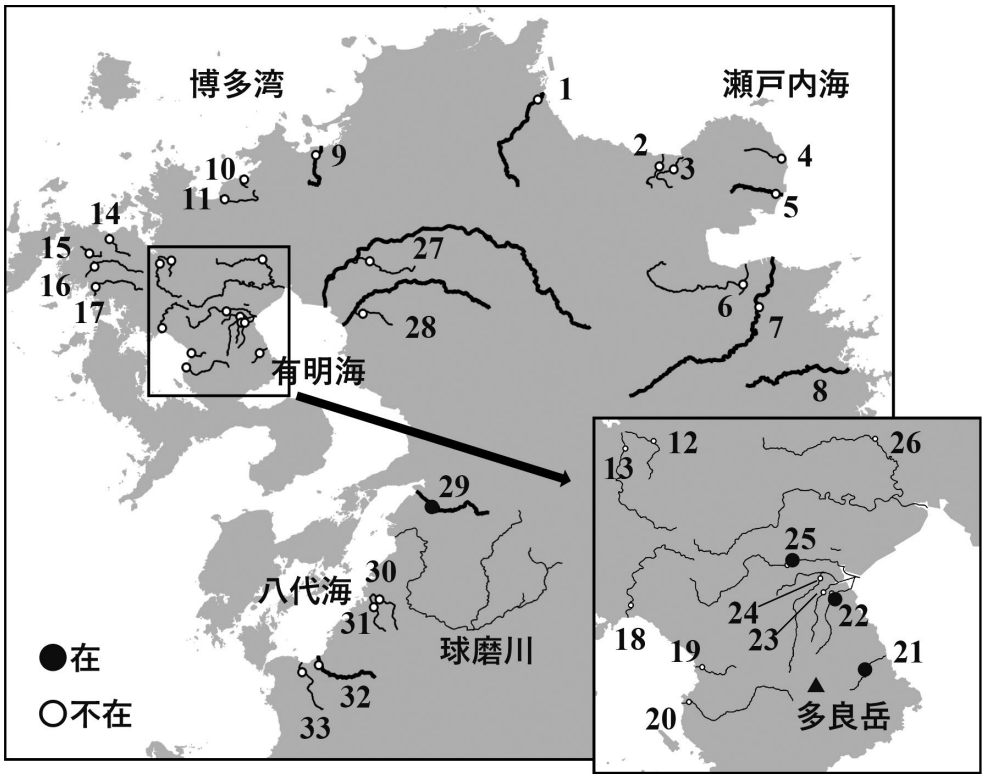

図 2. 九州におけるカジカ回遊型の分布図（2005 年前後）．1960 年代の生息河川は太い線の川として描いた．主に，2005 年の調査結果をプロットで示した（不在河川については一部，他の年の調査結果を含む）．1）今川（1998 年データ），2）駅館川，3）寄藻川，4）田深川，5）安岐川，6）大分川水系寒田川，7）大野川，8）番匠川（未調査），9）室見川（2006 年），10）加茂川，11）玉島川，12）伊万里川，13）有田川，14）志佐川，15）江迎川，16）佐々川，17）相浦川，18）川棚川，19）江ノ串川，20）郡川，21）糸岐川，22）浜川，23）石木津川，24）鹿島川水系中川，25）塩田川，26）六角川水系牛津川，27）筑後川水系広川（2009 年），28）矢部川水系飯江川（1998 年），29）氷川，30）佐敷川，31）湯浦川，32）米ノ津川，33）高尾野川．国土交通省国土数値情報ダウンロードサイトの河川（ライン）を使って作成した．

録がある幾つかの河川とその近隣河川を含んでいた．1960 年代には瀬戸内海，博多湾，有明海東岸，八代海に注ぐ河川から記録されている（水野・丹羽，1961；倉若，1985）のに対し，2005 年の調査では有明海西岸の 3 河川と八代海に流入する氷川でのみ確認された（図 2）．これらを総合すると，瀬戸内海と博多湾に流入する河川の個体群は姿を消し，八代海の分布域が縮小傾向にあると判断された．有明海については，2005 年に採集された西岸地域がかつての未調査エリアであることを考えたとき，かつて広域に分布していたものが大幅に縮小していることを想像させた．

その後の調査で，有明海西岸地域では，初夏には多数の河川でカジカ回遊型の稚魚が見られた（図 2 の 23 石木津川，24 中川，26 牛津川でも 2005 年以降の調査で，夏季，稚魚が採集されたことがある）．ただし，そのうちの幾つかの河川では稚魚が遡上してくるものの，横断構造物で遡上を阻まれ，生息可能な礫床まで達することができず，無効分散となっていることが，採捕調査などで示されている（菅野，2019）．なお，図 2 に示した有明海流入河川のすべての最下流の堰下には，春から初夏にかけてヤマノカミも姿を見せるが，夏以降も継続して観察できる河川は半数ほどである．この地域では，カジカ回遊型だけでなく，ヤマノカミも横断構造物による遡上阻害を受けていることを強調しておきたい．

球磨川のカジカ回遊型と横断構造物の竣工

球磨川は，熊本県の人吉盆地を貫流し，八代平野を通過，そして八代海に注ぐ流路延長 115 km の一級河川で，人吉盆地と八代平野間に山間狭窄区間を持つ点に特徴がある（図 3a）．九州では，尺アユが釣れることで著名な川のひとつであるが，かつてはカジカ回遊型も生息していた．レッドデータブックくまもと 2019（熊本県，2019）では（ウツセミカジカとして記述），球磨川支流の川辺川において，“ 昔，竹かごで捕り，みそ汁で食べるほどたくさん捕れていたと聞くが，今では絶滅 ” と記されている．いつ頃，姿を消したかについて記載はないが，1950 年代から 1960 年代にかけて八代海と人吉盆地をつなぐ区間に複数の横断構造物が設置された頃が，絶滅の時期として最も疑われる．河口から約 15 km と約 30 km 上流には発電ダムの荒瀬ダム（1955 年竣工）と瀬戸石

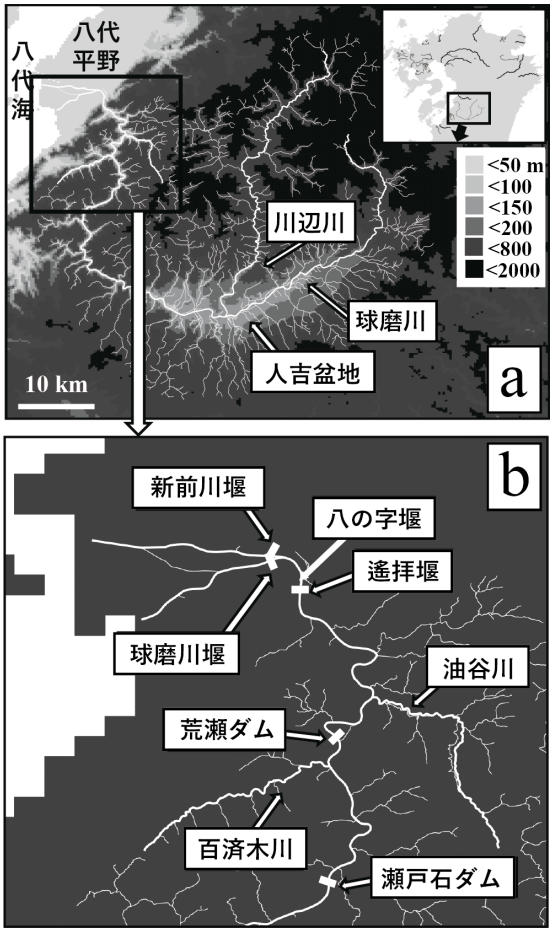

図 3. 球磨川水系のデジタル標高図（a）および球磨川下流域の横断構造物の位置図（b）．国土交通省国土数値情報ダウンロードサイトの標高・傾斜度 5 次メッシュおよび河川（ライン）を使って作成した．

ダム（1958 年竣工），球磨川河口から約 6 km 上流には分流堰の球磨川堰（1967 年竣工），派川の前川河口から約 5 km 上流に同じく分流堰の新前川堰（1967 年竣工），そして，河口から約 9 km 上流には農業・工業用の取水堰である遙拝堰（1969 年竣工）が建設された（図 3b）．その後，魚がのぼりやすい川づくり事業（上村・矢野，1996）など，通し回遊魚の移動に配慮した整備がすすめられたが，複数の横断構造物が連続したため，そういった事業の効果は限定的であった思われる．なお，その後，2012 年から 2018 年にかけて荒瀬ダムが撤去され（山内，2018），水生生物の移動阻害の要因のひとつが解消されたことを付記しておく．

九州における現在のカジカ回遊型の分布は小水系の河川下流域（Kanno et al.，2018）であることを先述したが，球磨川は流路延長 115 km の大水系であるため，矛盾に感じられるかもしれない．これは，現在の生息河川が単に小水系というだけで，かつての分布はその限りではないことを意味している．球磨川だけでなく，九州の最大河川である筑後川（流路延長 143 km）をはじめとして，

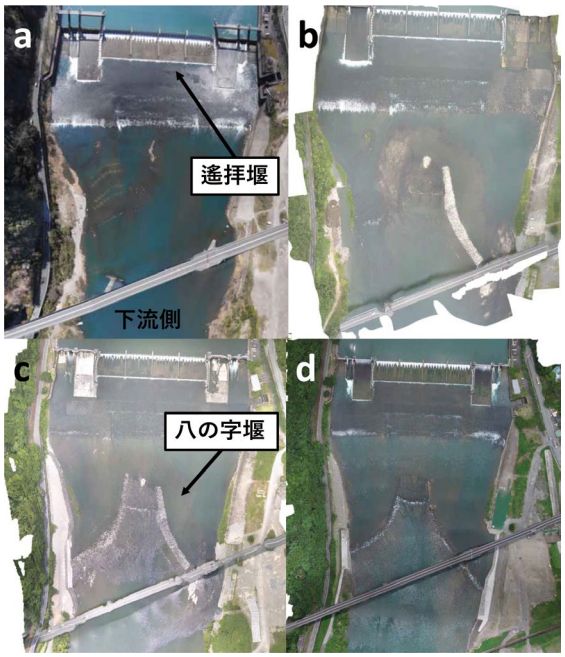

図 4. ドローン空撮による八の字堰建設の様子（a：2012 年 3 月，b：2017 年 9 月，c：2018 年 6 月，d：2019 年 8 月）

矢部川（流路延長 61 km）にもカジカ回遊型の生息記録がある（倉若，1985）．水資源利用等から，大水系ほど下流域に潮止堰や取水堰などが建設され，海域と河川の礫床区間までに横断構造物が存在しない川が，急勾配の小水系だけになってしまった結果である．

八の字堰による瀬の再生事業

球磨川の八の字堰は 2019 年 3 月に完成した大型落差工である（図 4c）．河口から約 8.8 km に位置し（図 3b），上空から見ると漢字の八の字形状をしている点に特徴がある．この形状は 1608 年に加藤清正によって築造された旧遙拝堰を模したものである（山本，2019）．ここで旧遙拝堰と称したのは，この 200 m ほど上流側に，先に述べた現在の遙拝堰があるためである（図 3b，4a）．この大型落差工（八の字堰）の設置の目的は，瀬の再生と河床低下対策である（濱邉・村岡，2016）．現在の遙拝堰直下の瀬は河口に最も近いアユ *Plecoglossus altivelis altivelis* の産卵場であったが，その面積が大幅に縮小していること，そして，球磨川のアユは全国各地から釣り客や観光客が訪れる重要な観光資源であることから，その瀬の再生は生態系や水産資源の側面だけでなく観光面でも問題視されてきた．一方，球磨川の中流部では洪水被害の軽減を目的とした掘削事業が継続的に行われていた．この掘削土砂の一部を環境再生に有効活用する計画があり，そのひとつが遙拝堰下流の瀬の再生事業であった．なお，河口部では掘削土砂の投入により，塩性湿地の再生事業（上久保ほか，2018）が行われたことも付記しておく．

2013 年 1 月に球磨川下流域環境デザイン検討会が設置され，2015 年 3 月まで計 8 回の議論を行い，流速等のシミュレーション解析や水理模型実験などの結果に基づき，遙拝堰下流の瀬の再生の目標値の設定，再生のための整備方法，景観に配慮したデザイン等が検討された（濱邉・村岡，2016；山本，2019）．その後，2015 年度から施工が始まり，2016 年度には左岸側（図 4b），2017 年度には右岸側の堰が設置され（図 4c），2019 年 3 月に完成（図 4d），同年 5 月に完成記念式典が行われた．なお，工法等の詳細は，上久保・服部（2021）を参考にしていただきたい．

八の字堰下流の瀬でのカジカ回遊型の復活？

国土交通省八代河川国道事務所では，毎年，八の字堰設置個所とその周辺で調査を行っている（表 1）．八の字堰下流に再生された瀬に，カジカ回遊型が最初に出現したのは，2018 年度の河川水辺の国勢調査で，八の字堰の流水部分の設置を終えた（図 4c）翌年からである．その年，確認されたカジカ回遊型は体長 50 mm に満たない当歳魚であったため，八代海流入河川でカジカ回遊型が安定してみられる氷川の個体群の無効分散と考えられていた．しかしながら，その後，現在までコンスタントに出現し，また，2020 年からは産卵期にも調査が行われ，毎年，卵塊とそれを保護する雄が確認されている（図 1b）．カジカ回遊型が遡上できる区間内に，その生息と産卵を可能とする瀬が再生された結果であると判断される．なお，河川事務所の調査の中で，八の字堰下で確認された個体の一部についてはミトコンドリア DNA 分析が行われており，その塩基配列の特徴はカジカ中卵型と一致したことが明らかとなっている．

八の字堰による瀬の再生事業の生物的な目的・目標は，アユが産卵できる環境の整備にあった．その効果については，はみ跡の面積の変化と産卵の有無で示されており（山本，2019），2016 年度に八の字の片側が完成し（図 4b），その翌年からアユのはみ跡の面積が大幅に増加している．元々，アユの産卵場の再生が目標であったことや，カジカ回遊型が出現し始めた当初，無効分散の可能性が考えられたことから，絶滅種の復活として最初に報道されたのは，最初の確認から 5 年以上経過した 2024 年 2 月（内村，2024）であった．そして，最初の発見から現在まで，地域の中での注目度も決して高いとは言えない状況にある．国土交通省の環境再生事業の中で，水系単位での絶滅種の復活の事例がどの程度あるかは把握していないが，注目すべき貴重な環境再生事例であると考えている．

筆者らは，2024 年 5 月に球磨川と氷川でカジカの環境 DNA 調査を実施した．分析手法やプライマー・プローブなどの情報は菅野（2019）に示されている．いずれも生息が確認されている瀬の下流，3–5 か所で各 1 L 採水した．球磨川のカジカ回遊型の DNA コピー数の最大値は 2.2 copies/ml で，氷川のコピー数の最大値（46.7 copies/ml）の約 1/20 であった．ただし，これらの 2 河川は規模が大きく異なるため，河川の流量についても検討する必要がある．球磨川については採水地点の上流 2 km（河口から約 10 km）に位置する国交省の横石観測所の流量速報値 117 m^3/s を元に，環境 DNA フラックス（河野ほか，2017）を算出したところ，256×10^6 copies/s となった．氷川については，採水地周辺の流量データは入手できなかったが，本流の上流の氷川ダムの放流量（熊本県統合型防災情報システムから 2 か月前までのデータダウンロードが可能）は 2.8 m^3/s で，採水地の上流側で支流と本流が合流すること，その支流の規模が氷川ダムの集水域とほぼ同じ流域面積であったため，ダム放流量の 2 倍を流量の仮値としたところ，その環境 DNA フラックスは 261×10^6 copies/s となった．これらの数字は，球磨川のカジカ回遊型の生息密度は氷川に比べて低いものの、現存量は同じ

表 1. 球磨川の八の字堰周辺でのカジカ回遊型の調査結果

調査年月	調査内容	採捕数	目視数	産卵巣確認数
2018 年 7 月	魚類相（河川水辺の国勢調査）	1		
同年 8 月	魚類相調査	6		
2019 年 8 月	魚類相調査	4		
2020 年 2 月	カジカ産卵調査			3
同年 9 月	魚類相調査	1		
同年 11 月	カジカ生息状況調査	2	6	
2021 年 1 月	カジカ産卵調査		5	3
同年 9 月	カジカ生息状況調査	3		
2022 年 1 月	カジカ産卵調査	1	4	2
同年 9 月	カジカ生息状況調査	7	3	
2023 年 2 月	カジカ産卵調査	4	1	2

魚類相調査は投網，たも網，さで網，刺網，定置網を使った採捕とシュノーケリング下での目視（一部，延縄，かご網，セルビンによる採捕），カジカ生息状況調査および産卵調査はたも網による採捕とシュノーケリング下での目視による 30 分から 1 時間程度の調査結果に基づく．

程度である可能性を示している．球磨川の流域面積は氷川の 10 倍以上であること，環境再生事業でカジカ回遊型の生息が可能となった瀬が八の字堰下の 1 か所だけであることを考えたとき，そこでの生息量はかなり多いのかもしれない．

今後の課題

さて，球磨川の回遊型カジカの更なる生息の安定に向けて，幾つか提案しておきたい．まず，人工的に造られた瀬の環境を長期に維持するためのモニタリングと順応的管理である．この点は，カジカ回遊型だけでなく，アユの生育場・産卵場の維持という視点でも同様である．モニタリングを継続し，場の劣化が確認されたら，即座にメンテナンスを行う必要がある．次に，生息可能な範囲を広げるためにも，さらに上流へと遡上できる整備に取り組む必要がある．かつては，河口から約 66 km の人吉盆地の川辺川まで遡上していた（熊本県，2019）ため，それに近づけることが望まれるが，それより下流にも良好な環境があり，まずはそこまで遡上できる対策や整備が望まれる．河口から約 15 km に位置していた荒瀬ダムの撤去後，ダム湛水区間の土砂移動が始まり，その下流に新たな砂州が形成されるなど（大槻ほか，2016），人吉盆地から八代平野までの山間狭窄区間の河川環境は改善傾向にある．そして，この区間には，油谷川や百済木川など，比較的急勾配の支流が流入している（図 3b）．したがって，現在，カジカ回遊型の生息の上限となっている遙拝堰において，移動阻害を解消するだけで，瀬の再生のみに頼らず，カジカ回遊型の生息場・生息域を大幅に拡大できると確信している．球磨川で復活を遂げたカジカ回遊型が長期に個体群を維持できるように，次なる策が講じられることを期待したい．

謝　辞

筆頭著者は，当時設置された球磨川下流域環境デザイン検討会の委員であり，学識的な立場で八の字堰による瀬の再生事業に関わったことを付記したい．本論文に記述した八の字堰下のモニタリング調査結果などは，国土交通省八代河川国道事務所の歴代の担当者より，随時，情報提供された．また，九州のカジカ回遊型の分布調査については，当時，九州大学大学院生物資源環境科学府附属水産実験所に所属した学生諸君にサポートいただいた．ここに記して謝意を示す．

引用文献

福岡県．2014．カジカ中卵型，福岡県の希少野生生物：https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/rdbs/detail/201400019（参照 2024-05-30）

濱邉竜一・村岡　薫．2016．加藤清正由来の八の字堰の復元による生物多様性を目指して：https://www.qsr.mlit.go.jp/n-shiryo/kenkyu/program/01/01_16.pdf（参照 2024-05-30）

鹿児島県．2015．選定種一覧（動物），レッドリスト（平成 26 年改訂）：https://www.pref.kagoshima.jp/ad04/kurashi-kankyo/kankyo/yasei/reddata/documents/53565_20211029173904-1.pdf（参照 2024-05-30）

上久保祐志・服部洋佑．2021．瀬の再生と土木遺産の再現　八の字堰（熊本県八代市）．建設機械施工，73：42–46.

上久保祐志・伊豫岡宏樹・鬼倉徳雄・乾　隆帝・山本恭裕・入り江博樹．2018．球磨川河口域における自然再生事業を対象としたモニタリング．土木学会論文集 B3（海洋開発），74：I_1012–I_1017.

菅野一輝．2019．九州・中国地方に生息するカジカ種群の形態・生態・遺伝的特性に関する研究．九州大学，2019，博士論文．

Kanno K., N. Onikura, Y. Kurita, A. Koyama, J. Nakajima. 2018. Morphological, distributional, and genetic characteristics of *Cottus pollux* in the Kyushu Island, Japan: indication of fluvial and amphidromous life histories within a single lineage. Ichthyol. Res., 65: 462-470.

河野誉仁・赤松良久・後藤益滋・乾　隆帝．2017．環境 DNA を用いたアユの定量化と降下状況モニタリングの試み．河川技術論文集，23：669–674.

熊本県．2019．5 淡水魚類，レッドデータブックくまもと 2019：https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/108543.pdf（参照 2024-05-30）

倉若欣司．1985．相互認知と種分化．玉野井逸朗・上村保子・坂井昭宏（編），pp. 55–74．認識と行動　13 の視点．培風館，東京．

水野信彦・丹羽　弥．1961．カジカ *Cottus pollux* GÜNTHER の生態的 2 型．動物学雑誌，70：267–275.

長崎県．2022．長崎県レッドリスト 2022：https://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2022/04/1648813265.pdf（参照 2024-05-30）

中坊徹次・甲斐嘉晃，2013．カジカ科．中坊徹次（編），p.1174，pp. 2061–2067．日本産魚類検索全種の同定，第 3 版．東海大学出版会，秦野 .

大分県．2022．魚類・頭索類，レッドデータブックおおいた 2022：https://www.rdb-oita.jp/data/?rdb_category%5B%5D=%E9%AD%9A%E9%A1%9E%E3%83%BB%E9%A0%AD%E7%B4%A2%E9%A1%9E（参照 2024-05-30）

大槻順朗・伊豫岡宏樹・二瓶康雄・吉森佑介・中村俊介・鬼倉徳雄．2016．荒瀬ダム撤去後の堆積土砂の流出・堆積状況．土木学会論文集 B1（水工学），72：I_853–I_858.

佐賀県．2016．佐賀県レッドリスト 2016（汽水・淡水魚類），佐賀県レッドデータブック（レッドリスト）：https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00314125/3_14125_289391_up_qr7u8hj7.pdf（参照 2024-05-30）

内村大作．2024．清正公の「八の字堰」復元　球磨川　カジカ帰る　餌場の瀬再生，読売新聞全国版，2024 年 2 月 12 日西部朝刊，30 頁

上村恭一・矢野日出東．1996．球磨川における魚がのぼりやすい川づくり事業～新前川堰魚道改築と効果検証～．九州技報，20：15–20.

山本恭裕．2019．球磨川自然再生事業（遙拝）の完成～八の字の形状復元と瀬の再生～．九州技報，65：91–94.

山内桂王．2018．荒瀬ダム撤去工事について．九州技報，62：74–81.

（鬼倉徳雄　Norio Onikura：〒 811–3304　福岡県福津市津屋崎 4-46-24　九州大学大学院農学研究院　e-mail: onikura@agr.kyushu-u.ac.jp；岸良武志　Takeshi Kishira：〒 866–0831　熊本県八代市萩原町 1-708-1　国土交通省九州地方整備局八代河川国道事務所　e-mail: kishira-t89vb@milt.go.jp；中島　淳 Jun Nakajima：〒 818–0135　福岡県太宰府市大字向佐野 39　福岡県保健環境研究所　e-mail: oikawamaru@gmail.com；程　楽添　Letian Cheng：〒 811–3304　福岡県福津市津屋崎 4-46-24

九州大学大学院生物資源環境科学府　e-mail: ncataria@126.com；小山彰彦　Akihiko Koyama：〒 811–3304　福岡県福津市津屋崎 4-46-24　九州大学大学院農学研究院　e-mail: koyamaakihiko15@gmail.com；橋口真大　Masahiro Hashiguchi：〒 812–0055　福岡県福岡市東区東浜 1-5-12　いであ株式会社九州支店　e-mail: hsg21418@ideacon.co.jp；菅野一輝 Kazuki Kanno：〒 170–0013　東京都豊島区東池袋 2-23-2　株式会社建設環境研究所　e-mail: kanno@kensetsukankyo.co.jp；岡本佳之　Yoshiyuki Okamoto：〒 808–0146 福岡県北九州市若松区高須西 1-14-13　株式会社エコプラン研究所　e-mail: yoshiokamo@gmail.com）

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌 72(1):98–100
2025 年 4 月 25 日発行

トピックス

ETYFish Project の紹介とカワヤツメ属 *Lethenteron* およびカマキリ属 *Rheopresbe* の語源における意味と意図

はじめに—ETYFish Project について

Scharpf and Lazara（2014）および Scharpf（2024）は，自らが運営するオンラインプロジェクト “The ETYFish Project—fish name etymology database” の冒頭において，Gill（1896）の “The means for ascertaining or confirming the etymologies of many scientific names are, perhaps, not available for all who might desire to ascertain them, and they are often wrongly analyzed” という言葉を紹介し，その方法の空白を埋めるためにこのプロジェクトを立ち上げたとしている．学名の表す意味は辞書（ラテン語・ギリシャ語あるいは英語）を引くことによって推測できるが，その学名が古いほど語源 etymology を明示していないことも多く，命名者の本当の意図は見えにくい．Scharpf（2024）はそのことにより誤解が流布していた実例もいくつか挙げている．最近，“The ETYFish Project” の存在を知りそれを利用することにより，私自身の研究対象魚の学名解釈が命名者の意図と一致しない経験をしたので紹介する．

Scharpf（2024）によれば，ETYFish Project は Christopher Scharpf 氏が Kenneth J. Lazara 氏と二人で 2009 年から始め，2013 年に初めてオンラインで公開された．Lazara 氏が体調を崩し 2014 年にプロジェクトを離れてからは Scharpf 氏が一人で運営している．学名記載の原典に基づいてデータベースは随時追加・更新されており，現在（2024 年 10 月）で 5281 属 332 亜属 37076 種 481 亜種，合計 43170 件の魚類の学名の語源がその情報源を含めて収録されている．日本においても同様の企て（中坊・平嶋，2015）があるが，ほとんど日本産の魚類に限られており掲載されているのは 1581 属（日本に産しない近縁属 69 を含む）4213 種に過ぎず，網羅性ははるかに及ばない．

カワヤツメ属 *Lethenteron* Creaser and Hubbs, 1922

Sakai et al.（2024）は日本産カワヤツメ属 *Lethenteron* がウチワスナヤツメ *L. satoi* Sakai, Iwata and Watanabe, 2024 in Sakai et al.（2024），ミナミスナヤツメ *L. hattai* Iwata, Sakai and Goto, 2024 in Sakai et al.（2024），キタスナヤツメ *L. mitsukurii*（Hatta, 1901），シベリアヤツメ *L. reissneri*（Dybowski, 1869），およびカワヤツメ *L. camtschaticum*（Tilesius, 1811）の 5 種からなることを明らかにした．カワヤツメの種名は産地名に，他の種名はすべて人名に因んでおり，意味するところに曖昧さはない．属名の *Lethenteron* は既知であり論文中で語源に言及することはなかったが，個人的な興味からまずいくつかのオンライン辞書を引いた（いちいち引用はしないが Cambridge Dictionary, Merriam-Webster Dictionary, Oxford English Dictionary など多数あり）．

Creaser and Hubbs（1922）によって *Entosphenus* 属の新亜属として立てられ，Vladykov and Follet（1967）によって独立属とされた *Lethenteron* はギリシャ語に由来し，*Lethe* と *enteron* に分解される．*Lethe* については，多少表現は違えどもどの辞書も “a river in Hades whose water cause drinkers to forget their past”（黄泉の国の川の一つで，水を飲むと前世の記憶を失う）とあり，また “forgetfulness of the past”（過去の忘却）そのものも表す，ということが記されている．さらにギリシャ神話を紐解いてみると（ベルフィオール，2020），*Lethe* は黄泉の国の忘却の川であるとともに，争いの女神 *Eris* の娘で忘却の女神（日本ではレーテーとして知られる）とあり，記憶の川であり記憶の女神でもある *Mnemosyne*（日本ではムネモシュネとして知られる）と対比されている．

いっぽうで *enteron* は “intestine, especially of embryo or invertebrate such as coelenterate”（腸あるいは消化管，特に胎児や腔腸動物のような無脊椎動物のもの）とある．なぜ胎児や腔腸動物かまではたどれなかったが，ギリシャ神話か何かに古い謂れがあるのかもしれない．すると *Lethenteron* とは「忘却の川の（に棲む？）腸のようなもの」か，「忘却の女神レーテーの内臓」というようなお